

びろっぱ

Vol. 435 10

近森会グループ 学術集会

表紙の写真



医療情報

コロナとの戦いの記録
ファミリー高知 成果発表会
電離放射線障害防止規則改定に伴う対応



近森病院 近森リハビリテーション病院 近森オルソリハビリテーション病院 からのお知らせ

11月3日(木)は通常診療を行います。



コロナとの戦いの記録

シリーズ
第1回



“一つの災害”ともいえるコロナ禍から、各部署がどのような影響を受けどの様に対応したか、また、どういった思いで奮闘しているのかなどを情報共有として、また後世に残す記録として当誌で取り上げて参ります。

看護部

近森病院 看護部長 吉永 富美
よしなが ふみ



2020年4月、始まった時から怒涛

新型コロナウイルス感染症は、当院においても多方面にわたり大きな影響がありました。高知県で感染者が増えた2020年4月には全面会禁止が開始となりました。不安を抱えたまま療養生活を余儀なくされた患者さん、ご家族に対し、早期よりリモート面会や看護師によるご家族への電話報告等を現場の看護師長たちが工夫して対応してくれました。

理事長の示す「地域医療の最後の砦になろう」という言葉に突き動かされるように、次々と状況に応じ発熱外来の運営、コロナ病床の開設等を行っていきました。

それぞれの立場で病院を支える

今年2月のクラスター発生時は予約入院や当院の使命である救急受け入れも全面ストップせざるを得ない状況になり、大変厳しい状況でした。その中で、石田医師やICN(感染管理看護師)の近森副看護部長を始めとするICT(感染対策チーム)の存在は大きかったです。昼夜問わずに的確な指示と病床管理や人員配置への相談対応、また、感染者や濃厚接触者への細かい配慮もしてもらい、大きな支えとなりました。ストレスチェックや面接を通し、スタッフのメンタル面を支えてくれたリエゾンチームの存在も有り難かったです。

毎日が決断と交渉の繰り返し

できるだけ救命救急センターとして救急の受け入れを継続しながら、

新型コロナウイルス感染症の中等症、重症患者の受け入れもできるようにするために、看護部としては、病床管理、人員配置等「決断と交渉」の



繰り返しでした。感染状況やスタッフの勤務状況を見ながら、病床の変更や人員配置、応援体制等を行い、これまで経験したことのない非常事態に、組織の結束や情報共有に努めました。集中治療部の病床の休止や病棟の閉鎖、発熱外来の拡張に伴う入退院センターの縮小など収益の減少につながる提案も理解し支援してくれた経営陣と、受付や物品、隔離範囲や搬送経路の確保などに迅速に動いてくれた管理部に感謝します。

志を共にする仲間～困難な時に問われる真価～

現在は、薬剤部や臨床栄養部、リハビリスタッフ等他職種の協力支援もあり、救急受け入れや病床確保ができるようになってきました。また、緊急事態下ではスタッフの頑張り大きく、先の見えない状況の中一人ひとりが使命感をもとに臨機応変に動いてくれ、応援体制や協力体制がとれました。コロナ禍を経験したことでスタッフも大きく成長したように思います。さらに自分も何か協力できればと退職したスタッフも応援勤務に来てくれたのは大変うれしく力づけられました。

最後に、連日の検査や隔離のための病床の変更、大切な家族に会えない状況を我慢し協力いただいた患者さん、ご家族の皆様感謝いたします。まだ、コロナ禍の生活は続きますが、看護の団結力と粘り強さで地域医療に貢献できるようにこれからも頑張りたいと思います。



▲ ICTメンバーから防護服着用の手順の指導を受けるCUスタッフ



▲ CUカンファレンスに参加するICTメンバー(防護服着用のCUスタッフは着替えが多いため紺色のスクラブを着用)



▲ リエゾンチームがスタッフの心のケアとして面談なども積極的に行った

ER

近森病院 救命救急センター長 根岸 正敏
救急科 主任部長 ねがし まさとし



感染を防いで、かつ救命を

新型コロナウイルス感染症の第1波から2年半を迎えますが、近森病院救命救急センターでは、数々のコロナ対策を行いながら救急患者さんの受け入れを行ってきました。特に外来部門であるERでは、感染の情報など全くない患者さんも多数搬入されるために、疑い患者さんに対しての陰圧室使用と個人感染防御から始まりました。救急隊からの事前情報などを元に、感染の可能性をレベル分けしたうえで、それぞれに対応した感染防御を行い、特に人工呼吸器管理が必要な場合には、エアロゾル、飛沫対策をさらに厳重に行ってきました。

昨日の限界を超え今日、より多くの患者さんを ～陰圧装置を仮設追加～

コロナ患者さんの増加に伴い、外来ベッド12床中の陰圧対応の3床(R1,2,Y7)を使用しながら、さらに不足分は室内用吸引パネルを適宜用いることにより最大限受け入れを行ってきました。また最近では、重症ベッド2床(R3,4)にも仮設式の陰圧装置を整備しての対応を行っています。(この装置には、ヘパフィルターを組み込みがあり、ウイルスをまき散らす危険はほぼありません。)

2月のER閉鎖時も超重症患者の受け入れは続けた。 第7波で感染対応ベッドが埋まろうが 創意工夫で乗り越える

2022年2月には、病院内一般病棟でのクラスター発生により、ベッド、職員不足などから約2週間にわたりERを閉鎖せざるを得ない状況となってしまいましたが、この間もヘリ搬送などの超重症患者さんの受け入れは止めることなく対応してまいりました。現在、第7波との戦いの最中ですが、今回の爆発的な発生は多くの医療機関での受け入れ困難例が多発する状況になり、当院では苦肉の策としてERの入り口で救急車に待機していただき、その車内で患者さんの状態を確認した上で、抗原検査を施行しお待ちいただく事態も生じておりますが、症状の悪化もなく対応できました。

絶え間ないコロナ禍を戦い抜く

センター職員一人一人の感染予防への強い責任意識、病院の感染対策室、診療支援部、施設用度課等各部署の温かい支援により、これまで救命救急



オープンスペースの重症ベッド2床(R3,4)に仮設式の陰圧装置を整備。(下↓は各床の拡大写真)



各床の様子。ビニールカーテンで仕切り、ベッドの両側にヘパフィルター設置、換気用ダクトホースを窓に伸ばし空気を排出。



8月某日、受け入れ先の病院がない2台の救急車が来院。患者さんの状態を確認し、車内で抗原検査の結果を待っている。

センターでのクラスターはゼロで経過しております。

今後のコロナ感染の動向は不明ですが、さらに気を引き締めて、救命救急センターとしての使命を果たしつつ、コロナ患者さんにも対応していく所存です。

ソーシャル ワーカー

医療福祉部 部長
西本 奈加 にしもと なか



「〇〇病院、新規入院の受け入れを停止するそうです」

「〇〇病院、新規入院の受け入れを停止するそうです」

7月下旬、連携先に転院相談をおこなったソーシャルワーカーから報告がありました。その後、次々と続いた同様の報告は、8月末までに34件。「クラスター発生」「患者または職員から陽性者が出現」「出勤できない職員の増加で体制が整わない」などの状況で、未だ再開めどが立たないところも少なくありません。後方連携にとって深刻な事態です。

次ページへ続く ➡

前ページから続く →

当部署の現状

部署では、各ソーシャルワーカーが得た情報を集約し毎日共有しています。また、部署内ホワイトボードに記録を残し、刻々と変化する状況の可視化を図っています。これは、他部署との情報共有・情報交換にも活用されています。

患者支援においては、転院以外の選択肢を積極的に考える必要があります。患者さんにとって適切かつ現実的な支援とは何か。ケース毎に話し合い、支援方針の見直しや相談先の切り替え等を行っています。しかし、すべてのケースに代替案を立てることは難しく、救急治療は終了しても次のステップに進めないケースが徐々に増えているのが実情です。

ひとケース毎に知恵を絞り ～トンネルを抜ける日まで～

救急車で救急病院に来て急性期治療を終え、治療の継続やリハビリのために地域の医療機関へ転院し、そこから自宅や施設など生活の場へ戻っていく。これがひとつの治療の流れです。救急隊、



急性期病院、地域の医療機関、施設・在宅支援の事業所は繋がり、連携を図りながら患者さんにかかわっています。今、コロナによってこの連携が機能不全に陥っています。一気に解決は図れない、ひとケース毎に知恵を絞り解決を図っていくしかないと考えます。

「再開が決まったら連絡します」「待っています」「お互いに頑張りましょう」そう声を掛け合いながらこのトンネルを抜ける日を待っています。

臨床検査部

臨床検査部 臨床検査技師 主任
森 綾 もりあや



技師全員が検体採取講習を受講

それ以降、増加し続ける感染者数に対し、私たちは日本臨床衛生検査技師会が主催していた鼻腔からの検体採取講習を、技師全員が受講し新型コロナウイルス検査の検体採取を実施できる体制を整え、2022年6月には看護師が行っていた入院時検査の検体採取を臨床検査技師も行うようになり、8月には職員の出勤前検査の検体採取も行うようになりました。

県下の病院で最初に新型コロナ検査を稼働

日本で新型コロナウイルス感染症が確認された2020年1月当時、新型コロナウイルスに関する情報が少ないなか、臨床検査部では、県下主要な病院でも対応していなかった新型コロナウイルス検査を短期間で稼働し、細菌検査室では2020年4月には遺伝子検査(LAMP法)を、SRL検査室では7月に抗原検査を開始しました。臨床検査部に、遺伝子検査に精通した臨床検査技師がいたことと、検査設備が十分に整っていたため、迅速に検査を開始し、時間外や休日にも臨機応変に対応することができました。

早く正確な検査結果で早期診断・早期治療へ

この頃には1日の抗原検査件数が500件を超え、限られたスペース、最低限の人員で想定以上の検査を実施している状況でしたが、不安を感じている患者さんに少しでも早く正確な検査結果を報告し、早期診断・早期治療に繋げていただけるよう日々対応しています。

厳しい状況が続きましたが、今後も医師・看護師・その他の医療スタッフとともにチーム医療の一員として迅速で確実に検査を実施していきたいと思っています。



▲細菌検査室にてLAMP法の検体処理中



▲SRL検査室にて抗原定量検査を実施中

新型コロナウイルス 検査数の比較

第6波(2月)
6,168件

第7波(8月)
11,916件

講習会

第1回 JATSアカデミー* 大動脈弁形成ワークショップへの参加

2022年8月21日 / 東京

近森病院 心臓血管外科 科長

田井 龍太 たいりゅうた



*The **J**apanese **A**ssociation for **T**horacic **S**urgery
(日本胸部外科学会)
若手・中堅胸部外科医向けの
臨床・研究情報を学ぶ場です。

大動脈弁形成術の技術習得を希望する 中堅心臓血管外科専門医が参加

この度、8月21日(日)に開催されました大動脈弁形成ワークショップに参加してきました。JATSアカデミーは日本胸部外科学会の教育プログラムとして発足した会であり、記念すべき第1回開催への参加となりました。元々2月に予定されておりましたがコロナの影響で複数回の延期の後、今回厳密な感染対策の元、なんとか開催されました。

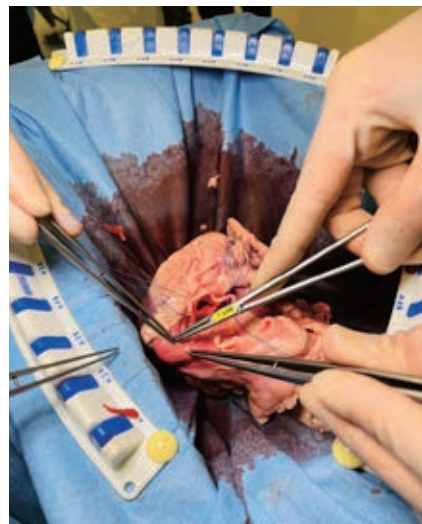
エキスパート医師が一步進んだ理論と手技を指導

大動脈弁形成自体は症例によっては非常に良い治療で、自身の大動脈弁を温存した形での基部置換など、今注目されている領域の治療法です。私自身はまだこの経験は無いのですが、今後より一步進んだ手術を習得すべく、ワークショップに参加し、理論と実際の手技を学んで参りました。

参加している先生方は私よりも一回りくらい上の先生が多い印象でしたが、エキスパートの先生方に指導して頂きながら大動脈基部の解剖や手術手技などを多く学んでくる事が出来ました。

診療への思いを新たに、全国の医師との触れあいが刺激に

大動脈弁形成術に限らず、今後の手術への応用が利く非常に有意義なセミナーだったと感じております。日々このような形で研鑽を続けながら、診療を続けて行きたいと思うとともに、多くの全国の先生方と触れあうことが出来、大変刺激になった1日でした。



近森病院 地域医療講演会 実習編 心臓・大動脈ウェットラボ 延期のお知らせ

来年以降開催が決まり次第、改めてご案内いたします。2023年お楽しみに!



▲前回、2019年11月10日の様子

テーマ 心臓の解剖と心臓血管治療

実習項目 (予定) 解剖全般・病理・PCI・心エコー検査・アブレーション・大動脈ステントグラフト冠動脈バイパス術・人工弁置換術・経カテーテル大動脈弁置換術(TAVI) など

献血

キャンペーン

ご協力
お願いします!



10/20(木)
12:30~17:15

場所 近森病院 総合受付
玄関前駐車場



近森会グループ
第5回
学術集会
開催

2022年
8月6日

持続可能な地域医療を テーマに

近森会グループ学術集会 大会長 塚田 暁
近森病院 消化器外科 主任部長 つかだ あきら

学会テーマは

今回の学会テーマの『持続可能な地域医療』は、近森会グループの目標の「今までの発想にとらわれない自己変革～高知の地域医療を守る最後の砦になろう!!～」から設定しました。これは全国に先駆け高齢化を10年、人口減は15年先行している高知県において、地域医療を守るためにどのような取り組みを行っているか、高知県ならではの問題点などに対しての解決策を発表してもらおうと考えたからです。

優れた発表の数々と活発な質疑応答

多くの部署より20演題が発表されました。どの演題も各部署での日頃の活動や問題点をどのように解決したかなど近森会グループをよりよくするための取り組みが発表され、それに対する質疑応答も活発に行われました。他部署の取り組みを自部署でも取り入れてみようという意気込みを感じました。



最優秀演題賞として薬剤部の宮崎俊明さんの『チーム医療ならびに地域連携の実践力向上を目指した薬剤師卒後研修カリキュラムの構築による教育的効果』が受賞されました。また座長賞として3演題が選出されましたが、その他の演題も大変優れていたため選考委員の方々は相当悩まれたのではないかと思います。

チーム医療の進化を目指し

今回の学術集会でもチーム医療において他部署がどのような取り組みを行っているかを知る良い機会になったのではないかと思います。発表から得たアイデアを日頃の臨床へ取り入れ、今以上にチーム医療が進化することにより、近森会グループの医療の質向上につながることを期待したいと思います。

最後に、コロナ禍での学術集会の開催にあたって準備、運営、感染対策に携わっていただいたスタッフに感謝申し上げます。

受賞者

受賞	演目	所属	氏名
最優秀演題賞	チーム医療ならびに地域連携の実践力向上を目指した薬剤師卒後研修カリキュラムの構築による教育的効果	近森病院薬剤部 薬剤師	宮崎 俊明
第1部座長賞	当院外来OTにおける脳卒中患者の自動車運転再開の実態について	近森リハビリテーション病院 リハ部 作業療法士	市川 彩湖
第2部座長賞	事例検討会を通して考えるDNARが取得された高齢心不全患者に対する意思決定支援	近森病院HCU 看護師	池上 小也加
第3部座長賞	来るべき大地震に備える～利用者の自助を高める取り組み～	訪問看護ステーション ちかもり 看護師	中川 絵美



学会受賞



第62回 日本呼吸器学会学術講演会
「呼吸器病学ことはじめ」
優秀賞受賞

演題 急性膿胸における、歯性疾患(重症歯周病)との関連についての検討



1歩前進

近森病院
呼吸器内科・感染症内科
馬場 咲歩 ばば さきほ

歯周病の病原体は口腔内に限局するだけでなく、菌血症などを生じて、様々な臓器に感染症をもたらす可能性があると考えられています。

今回の検討は、胸水検体の培養の結果、口腔内の常在菌を多く認めたことからスタートし、膿胸症例における約半数に重症歯周炎を合併しているという結果を得ました。

膿胸は、後遺症を残すこともある重症度の高い疾患です。それが口腔内環境を衛生的に保つこと

で防げるのであれば、費用対効果の高い対策ではないかと考えます。

当院では歯科衛生士が各病棟に常在するという恵まれた環境にあり、今後更に詳しい解析ができればと思っています。

また今回、臨床上の疑問を形にしてデータを得て、過去の文献と照らし合わせて調べ、仮説を立てるといった、よき臨床医であるために必要な1歩を踏み出せたかと思っています。ご指導いただいた、石田先生、中岡先生、白神先生ありがとうございました。目指す医師像にはまだまだ長い道のりですが、少しずつ前に進めるよう頑張っていきたいと思っています。

参加者

107名

(スタッフ、座長、発表者含む)

演者内訳 (名)

Dr	2
Ns	5
PT	2
OT	3
薬剤師	1
診療放射線技師	1
臨床工学技士	1
管理栄養士	4
SW	1

座長

- 〈第1部〉
 - ・消化器内科 大川科長
 - ・本院ST 小林主任
- 〈第2部〉
 - ・消化器内科 梅下科長
 - ・救命救急病棟 樫尾師長
- 〈第3部〉
 - ・8A 中山師長
 - ・リハ病院PT 和田科長補佐

アンケート結果 (回答者49名)

学術集会はいかがでしたか？

満足	39
やや満足	8
どちらともいえない	1 ※
やや不満	0
不満	0
無回答	1

※仕事の都合、すぐに退席したため

感想

- ・自分の職種でも関われる問題、課題があり、非常に勉強になりました。
- ・毎年よくなっているように思います。

第119回 日本内科学会ことはじめ2022
優秀演題賞受賞

演題 Streptococcus gallolyticus subsp. pasteurinusによる感染性心内膜炎・脳塞栓症を契機に発見された大腸癌の一例

近森病院
呼吸器内科・感染症内科
三枝 寛理 さえぐさ ひろよし

◀ 4月より院外研修へ。副賞の聴診器を首にかけて。



第119回 日本内科学会ことはじめ2022
優秀指導者賞受賞

指導者賞受賞について

近森病院 呼吸器内科・感染症内科 部長 **石田 正之** いしだ まさゆき



三枝寛理先生が先の内科学会総会で
行われた「医学生・研修医の日本内科学会
ことはじめ」で優秀演題賞を受賞し、その担当
指導医として、指導者賞を受賞しました。

受賞した演題は、培養検査で得られた細菌の結果からどのような病態が考えられるか、という感染症診療の一つの醍醐味をテーマとしており、その主張を、しっかり表現した素晴らしい発表でした。



第2回

社会福祉法人ファミーユ高知
支援の可視化プロジェクト

成果発表会

2022年7月2日

この1年、各事業が
取り組んだ内容と成果を共有

社会福祉法人ファミーユ高知 教育委員長
高知ハビリテレーリングセンター 副センター長
中越 太一 なかごし たいち



開催にあたって

2022年7月2日に成果発表会を開催いたしました。昨年度から開始した取り組みで「数値や結果だけでは表すことが難しい地域での支援」、その成果を可視化し、法人全体での共有はもちろん、普段お世話になっているみなさまにも知っていただくことを目的としています。



多様化する日常が伝わる発表の数々

法人が運営する11の事業は24時間365日の支援や日中活動の支援、就労支援や児童支援があり、今回は各部署より12演題が発表されました。

まだまだ、不慣れな部分ではありますが、当日まで各事業で昨年度の支援を振り返り、「利用者にとって」達成された内容や結果に至るプロセスが丁寧にまとめられていました。

当日お越しいただいた来賓のみなさまに優秀演題を4演題選んで頂きました。発表タイトルが個性的で内容が想像しづらいと思いますが、ご了承ください。



■ 優秀演題 (発表順)

演目	事業名
相談支援事業における自己実現 ～支援の力を1つに、自分らしい生活を支える為に～	相談支援事業所 (ハビリ)
「やれる」を「できた」に変えた支援	機能訓練(ハビリ)
This is サイコーにちょうどいいounパス	就労継続A型(ウェーブ)
月額工賃20,000円への歩み ～3年計画を1年で達成～	就労継続B型(ハビリ)

※ハビリ…高知ハビリテレーリングセンター/ウェーブ…しごと・生活サポートセンターウェーブ



地域支援はドラマチック

法人では「誰かの人生について本気で考えられる人」を目指す職員像として掲げています。障害の有無ではなく、地域での利用者とのドラマチックな奮闘記を次回もご報告させて頂きたいと考えております。



2021年
4月1日～

放射線管理の基準が厳しくなりました

電離放射線障害防止規則改訂に伴う対応

安全な放射線診療を
行うために
～診療放射線技師の役割～画像診断部
診療放射線技師 技師長
中村 伸治 なかむら しんじ

2021年4月1日から改正電離放射線障害防止規則が施行され、下記の表のようになりました。

眼の水晶体について年間150mSvから20mSv(平均)へと大きく限度が引き下げられましたので、安全衛生委員会や関係部署と協力して、医師・臨床工学技士含めた放射線診療従事者全体への対策を検討しました。

■ 個人被ばく線量限度(放射線診療従事者)

線量限度	通常時	年間
実効線量 (均等被ばく)	100mSv/5年 かつ50mSv/年	20mSv(平均)
等価線量限度	通常時	年間
眼の水晶体	150mSv/年	150mSv
皮膚	500mSv/年	500mSv

改訂

線量限度	通常時	年間
実効線量 (均等被ばく)	100mSv/5年 かつ50mSv/年	20mSv(平均)
等価線量限度	通常時	年間
眼の水晶体	100mSv/5年 かつ50mSv/年	20mSv(平均)
皮膚	500mSv/年	500mSv



- 写真左／黄色の丸部分が、水晶体専用の放射線測定器(ドジリス)。適切な位置で装着することで正確に測ることができる。
- 写真右／安全な放射線診療を行うため、これからも頑張ってまいります!

線量限度を超えるスタッフの存在により、
水晶体専用の測定器を導入

法律が変わると分かった時点で眼の被ばく線量を調べると、改定後の20mSvでは数名が超えてしまうことが分かりました。眼の水晶体の防護には放射線防護眼鏡を使用していますが、従来の計算方法では体に装着した2個のガラスバジジ(※)データから被ばく線量を導き出すため、防護眼鏡の効果が加味されません。

そこで、計算値による線量が比較的高い10名に水晶体専用の放射線測定器(ドジリス)(写真左)を着けてもらうことにしました。

ドジリスは防護眼鏡の内側で放射線を計測するので、防護眼鏡の効果を加味した実際の線量を測定することができます。これにより計算値が高かった9名も、被ばく量が低値になりました。

※ガラスバジジ…個人の放射線測定装置。1個は頭頸部の防護されていない部分に、もう1個はプロテクターの内部に装着しています(男性は胸、女性は腹部)。

数値が下がらない原因をチェック、解決へ

しかしその中で1名、まだ線量が高い値を示したスタッフがありました。

そこでさらに防護効果の高い防護眼鏡を購入し装着しましたが、依然として数値は高いままでした。ドジリスの装着位置、検査状況などを聞き取りした結果、ドジリスの装着位置が眼鏡の外側に寄っていることが判明しました。位置補正により、水晶体被ばく線量が下がりました。

適切な道具を適切に使用する

適切な道具を適切に使用することで、放射線の防護ができます。

今年の6月からは24名の放射線診療従事者がドジリスを装着しています。安心して放射線の検査や治療ができるよう個人が測定器や防護具を正しく装着しなくてはけません。検査や治療を行う放射線診療従事者の被ばくが一層少なくなるよう、検査室で使用する放射線防護具の必要数等、検討中です。

熱烈応援 昇格人事

近森会グループで元気に働く仲間を紹介します



画像診断部 副技師長
診療放射線技師

久保 行広
くぼ ゆきひろ

いい感じの フィルター役に

入社して早三十年が過ぎ去り、気がつけばスタッフの数も当初の4倍に増え大所帯となりました。

日々の業務、管理を技師長一人でこなすには負担が大きすぎ、なんとかサポートをと思っていたところ、この度副技師長心得を拝命しました。

画像診断部のスタッフが気持ちよく活躍できるよう、いい感じのフィルター役になれればと思って頑張ります。

小さな一歩を 大きな一歩へ

この度、画像診断部副技師長心得を拝命しました。

近森に就職してから30年あまり、入職時9名だった診療放射線技師は入れ替わりがありがたながら30名を超えるまでになりました。それに伴い業務環境も複雑・繁杂さを増してきています。中村技師長のサポートをしながら、少しずつでも改善できるよう努めていきたいと思っています。



画像診断部 副技師長
診療放射線技師

竹内 実
たけうち まこと

ハッスル研修医

仕事をするのが楽しく

今年の4月から初期研修医としての生活が始まって、早4ヶ月が終わってしまいました。現在はERで研修をさせていただいていますが、忙しくも充実した毎日を過ごしています。最近になってようやく自分が仕事にどう立ち回すべきなのかということが少しずつわかりだして、仕事をするのが楽しく

なってきました。しかし、学生の頃に身につけた知識だけでは対応できないことは多々あり、社会人として基本の報連相が思いのほかできておらず、上級医の先生方にご迷惑をおかけし、反省の毎日でもあります。

近森病院では、上級医の先生方が、研修医に真摯に向き合ってくださいるので、自分の至らない点を修正していただき、少しずつですが医師としても社会人としても成長していると感じています。今後はより一層、自己研鑽に励み、2年間の初期研修を終えた時に満足できるように頑張ります。



初期研修医 1年目

木村 和俊
きむら まさたか

表彰

法務大臣より 感謝状をいただきました

近森病院 総合心療センター
メンタルリハビリテーション部 部長
兼 作業療法室 室長 兼 事務長

山内 学 やまうち まなぶ



刑務所での就労支援活動～前田ケイ先生からのご推薦～

私は精神科臨床の中で社会生活スキルズトレーニング(SST)やサイコドラマなどの集団精神療法を積極的に学び実践していますが、司法に関わることなどは全く未知の分野でした。ところが、これまで指導や教育をして頂いた前田ケイ先生(ルーテル学院大学名誉教授)より、「あなたを推薦しました。あなたなら出来ますよ。お手伝いしてくださいね」と電話があり、「はい」と言ったことからどんどん話が進みました。

SSTを用いて

2006年から刑務所にてSSTを用いて就労支援を行っています。この

トレーニングは7回1クルの実践(3か月間)で、1回のセッションは100～120分で構成されています。認知へのアプローチを行う課題やロールトレーニングでは、支援される方がスキルアップしていることも実感します。

「社会を明るく」するために

本当に手探りからスタートし、現状把握をして制限があることで困りながらも、就労支援に携わっている友人や先生に相談したりアドバイスを求めたりサポートしてもらって、継続しています。

「社会を明るく」をするために「セッションを明るく」はできるようになってきています!

あの頃の集中治療室



今年3月に入社し総合受付で働く医事課の池内諒さんは、近森OB・OG会の設立者の一人、池内桂子さんのお孫さんです。桂子さんは1974年に入社し1988年に高知脳神経外科病院に請われて移るまでの14年間を近森病院で勤め、救急の礎を築いた先輩。

孫の日企画では、桂子さんに当時の思い出と、諒さん始め新人さんへの温かいメッセージを頂きました。



自慢のおばあちゃんです!

現在も施設で看護師としてフルタイム勤務している桂子さん。自分の分と一緒に諒さんのお弁当を5時起きで作っている。



諒さんの小学生の頃の夢は消防士。「おばあちゃんはお仕事で人を助けているから僕も人を助ける仕事につきたいです」と。職種は違いますが、患者さんを安心させられるような医療従事者になるために頑張ってください!

正博先生と

当時の集中病棟は、雨の日になるとバケツをあちこちに置かなければならない古い木造建て。ある時、正博先生(初代院長)が入院され、退院の際「お世話になった。お礼をしたいが欲しいものはあるか」と聞かれた。桂子さんが「先生、何よりもこの建物をどうにかしてほしい」と頼んだら、「分かった、お兄ちゃんに言うておく」と答えたそうだ。「お兄ちゃん」とは正博先生の長男である現理事長を指している。

近森理事長と

若かりし理事長とも、たくさんエピソードを持っている。ある時、桂子さんの部下だった看護婦が泣きながら「患者さんの前で立つ瀬がない」と詰所に戻ってきた。理由を聞くと「処置を手間取っている最中に理事長に叱り飛ばされた」と言う。桂子さんはすぐに理事長に「先生、スタッフには私が依頼したので、気に入らなかつたら私に言ってください」と交渉。そこから理事長に目をかけられ、時に真剣勝負のやり取りが始まった。「先生も私もはしかい(気性が荒い)者同士やったから」と笑う桂子さんに、同志として信頼し合うお二人の姿が目につく。

あの頃の集中治療室

救急を充実するべく奔走した草創期。輸血が足りなくなる

こともあり、患者さんの知り合いに電話をかけまくり、献血後すぐに検査室でクロスマッチして大急ぎで輸血を行っていた。まだ看護の勤務体制も整っておらず、主任だった桂子さんは、事故や急変があるたびに呼び出されていたようだ。

当時、桂子さんが記した集中治療室の報告書によると、深夜帯が一番忙しかったようだ。ある時、7歳の子どもの腹部破裂で運び込まれた。人工呼吸器をつける必要があったが、成人用のものしかなく、アンビューバッグを使い手で換気することにした。通常の夜勤3名では手が足りず1人増やしてもらい、4名体制で交代しながら一晩中バッグを押し続けた。皆、患者さんのために必死で、チームワークは抜群だった。

「私はスタッフに恵まれた」と桂子さん。今も昔も変わらず、「命を繋ぐため」集う仲間がいることが近森の一番の強みではないだろうか。

新人さんへ

「近森病院は本当に勉強をさせてくれる病院です。3年経った頃に、自分の成長を実感するでしょう。それまでは一日一日努力が必要。人命救助の場で緊張するかもしれませんが、患者さんへの優しい声かけを大事にしてください。」



- 写真左/1974年、退職する看護師さんとの記念写真。後列左から2人目が桂子さん。
- 写真右/忙しい合間をぬって学会発表も。「5年7か月の人工呼吸器患者さんの2泊3日の外泊」の演題は四国で唯一、全国学会で発表できる20題に選ばれた。研究に協力してくれた当時の手術部 兼 集中治療部 部長 平野政夫先生はじめ、スタッフとの記念写真。



リレーエッセイ

きょうは〇曜日？

近森病院
総合心療センター外来 武田 直子
副看護部長 たけだ なおこ



実は、有段者です！「龍馬旅券(パスポート)観光達人の二段」です。

この知人ぞ知る(知らない高知県民も多いと思われる)高知観光のアイテムは、ステージアップするシステムになっています。青→赤→ブロンズ→シルバー→ゴールドへ。ゴールドを制覇すると殿堂入りとなり、その後、ゴールド制覇を繰り返しながら初段～十段を昇格すると夢の免許皆伝に至ります。(殿堂入り後は観光達人となります)。



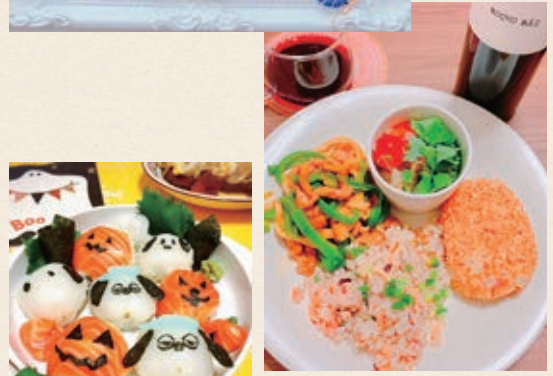
県外から高知に嫁いで幾星霜…。25年くらい仕事と子育てに追われ、ふと気づくとけこう身軽になっており、高知探検が始まりました。高知県の津々浦々、どこへいっても山川海があり、おいしい味もあちらこちらに。なんという贅沢でしょうか！

さらに、この高知探検で嬉しいのは、地域で暮らす「人」との出会い。観光キャッチフレーズは「今日は川曜日、海曜日、山曜日、味曜日、〇曜日」とありますが、私の場合は、「人」曜日です。

コロナ禍の今は、もっぱらドライブをして山川海を眺めています。観光達人の有段者として、自分の住んでいるところ自慢に努めていきたいと思えます。



私の趣味



手芸と料理

近森オルソ
リハビリテーション病院
4階病棟 看護師

梅木 真里奈 うめき まりな

私の趣味は手芸と料理です。昔から細かい作業が好きで服やアクセサリを作っており、自炊をするようになり食いしん坊なので料理にもハマりました。作品や料理を喜んでもらえる嬉しくて、すぐにまた作ることに没頭してしまいます。

FREE

まるまる 私の〇〇

〇〇にフリーワードを入れて語っていただきました

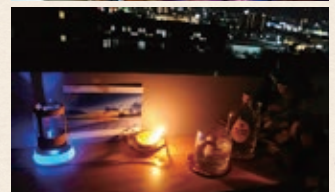
私の「ひとりあそび」

近森病院 北館5・6階病棟 看護師
矢野 ますみ やの ますみ



人生の半分を越え、子ども達は家庭を持ち、初めて独り暮らしをしています。近年コロナ禍で子ども達との食事ばかりか、友達との飲み会や川原でのBBQも行けず…。

そんな中、癒しを求め部屋の空間をデザインしました。ベランピング(※)から手を出し、ライトを設置しプールにナイトバー、空き部屋はキャンプグッズを購入して飾り、いつか行く「原付バイクでソロキャンプ」のイメージトレーニングの日々。誰にも邪魔されず今の所、自由時間を楽しんでいます。



※ベランピング…「ベランダ」と、高規格キャンプの「グランピング」を掛け合わせた造語で、ベランダでアウトドア気分を楽しむこと。

新型コロナウイルスワクチン

4回目接種

2022年8月19日～

当初、高齢者と特定の基礎疾患を持った方が接種対象とされてきましたが、7月からの全国的な感染拡大を受け、重症化リスクの高い方が多数集まる医療機関等の集団感染リスクを減らすため、医療従事者にも接種が追加されました。



今日のメニューは何だろう?



食堂専用Webページ

食堂のメニューがウェブでも確認いただけます。ログインパスワードは食堂の卓上ポスターをチェック!



▲スマートフォンページイメージ

歳時記

日中はまだまだ暑いですが、朝晩は少しずつ秋の訪れが!? 味覚で一足お先に秋を楽しみました。

9月12日、30度越えの真夏日に、総合心療センター前で。



※写真ご提供：左から2枚目より、診療情報課 吉原悠衣さん、総務課 矢野尚美さん、医事課 上甲浩道さん



編集室通信

近所の中学校建設予定地から1,300年前の建物、寺院、役所遺跡が見つかった。現在は立ち入ることは出来ないが、時々その前を通る事がある。今ではあたり一面田園風景になっているが、当時は大規模な水路があって中央に税を納める流通拠点であったとのこと。近所にこれだけ長い歴史があると思うと感慨深いものがある。つつじ

診療数

令和4年8月

電子カルテ管理課

● 近森会グループ

外来患者数 22,850人
 新入院患者数 977人
 退院患者数 1,006人

● 近森病院(急性期)

平均在院日数 12.25日
 地域医療支援病院 紹介率 65.41%
 地域医療支援病院 逆紹介率 214.91%
 救急車搬入件数 636件
 うち入院件数 316件
 手術件数 476件
 うち手術室実施 313件
 うち全身麻酔件数 217件



看護学校通信

「近森で看護師になりたい」思いへ繋げるための動画

近森病院附属看護学校 事務局 主任 谷 仁美 さんにひとみ

看護学校ホームページのメインビジュアルを更新しました。15秒Ver.に編集した動画は帯屋町ビジョンにて期間限定で放映しています。「看護師になりたい」から「近森病院附属看護学校で看護師になる」決意を一連にした内容で、本校の魅力が視覚的に伝わり、明るい未来が想像できる映像に仕上がりました。今後、「近森で看護師になりたい」受験生を増やすため、様々な場面で活用していきます。動画には在校生からもたくさんの反応があり、「看護師になる」決意が再認識でき、励みにもなっているようです。お忙しい中、撮影にご協力いただいた近森病院の皆様、ありがとうございました。

近森病院附属看護学校HPで動画公開中! ➡



宮下 公将

Masayuki Miyashita

診療支援部 施設用度課
課長代理

聞き手／ひろっぱ編集部

病院と外部をつなぎ
環境を整える
心配りのディレクター

出身は横浜。学習院大学に進学。新卒でユニクロへ就職し、半年ごとに地方を転々。高知へも店長として流れ着いた。その後、高知出身の奥様のご縁で高知で暮らすと決め近森病院に求職した。

「近森理事長が一般企業の社長のように経営をお考えで、ユニクロの経営理念と共通点が多かったことは非常にラッキーでした」。

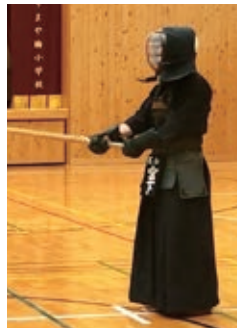
落とし穴をふさぐように

裏方として多くのプロジェクトを抱えており、部署間の調整、業者との交渉、医療を最優先にした安全性、確実性の配慮など、大変なことは想像できる。

どのように手掛けているのかを尋ねた。「どう手をつけたらいいかすぐに分からない時もありますが、ふとした時に不思議とひらめくことが多いです。これは特殊能力ではなく、小さな案件からコツコツやってきた経験によるものです。あとはいつでも油断せずに“落とし穴”を探してふさぐことでしょうか」。また秘訣を聞くと、「院内院外、本当に多くの専門家に囲まれていて、医療用語、建設用語、IT用語など、同じ日本語か?と思うくらいみなさん全然違う言葉を使いますので、その間に立って、それぞれの専門家に分かりやすい言葉で“通訳する”ように心がけています。ベクトルを合わせるために、これは本当に大切!」と、ニコニコ顔で念押しされた。

心を整え、面と向かう

4年ほど前に長男が習い始めたことをきっかけに剣道に出会った。「剣道を習う子ども



の気持ちを知らなくて、はじめは素振りだけするつもりでしたが、先生にうながされ、あれよあれよと面までつけていました(笑)。本当にちょっとかじっているだけです、剣道はいろいろ勉強になります。例えば、初めて先生に向かって面を打った時ですが、スカッという感じで…。相手は止まっているのに、素振りで練習したとおりに全然できなくて、面にあたらぬのです。驚きましたよ。でも、これは普段から人と正面から向き合うこと、目上の人の胸を借りることの大切さ、難しさに通じているのです。この本当の意味は実際に体験しないと絶対に分からない」と熱弁をふるった。

苦い失敗があり、今がある

以前、ひろっぱの『乞!熱烈応援』に掲載された際には、「剛毅木訥」(あれこれ言わず内面、外面の強さを発揮する)という言葉を選ばれていた。これは論語で「剛毅木訥仁に近し」と続くが、この時は「仁」を使うのは控えたという。まだ「剛毅木訥」にも到達していないのに、「仁」(論語で最も重要とされている「私心なくひとを思いやる心」)を使うのはまだまだ不相応と考えたからだ。

堅実な姿勢が印象的な宮下課長代理。しかし、「学生時代、新卒時代なんて本当にデタラメで、挫折や失敗もたくさんしました

よ」と振り返る。大学時代には所属していたトランポリン同好会で部員がほとんどやめて廃部寸前にしてしまったり、ユニクロでは副店長と揉めたこともあった。ただし、そこで自分の何がダメなのかをとことん考えることで、部活ではメンバーがやりがいをもって活動できる大所帯の組織に復活させ、ユニクロで失敗した時は質の高い計画を立てるノウハウを学ぶことができた。その失敗があるから今がある。だからこそ、学びは大切。自分が学び近森病院を良くすることで“地域貢献”につなげたいという。

苦い経験を糧にして、宮下課長代理の自己研鑽は続く。



大学のトランポリン同好会時代の写真。創部以来初となる全日本選手権の出場権を先輩が手にしたが、(自分が)出場エントリーを忘れるというとんでもないミスをしている。結局、試合出場は認められず、その後自ら頭を丸めたという苦い経験も。



趣味は高知に来てから始めた「釣り」。「なんせおもしろい!また、大自然に身を置けば、自分の悩みなんてちっぽけなことが分かる。そして、貴重な命を感謝していただく。最高のリフレッシュです」。

